

〈論文〉

「古代日本」の留学たち①
— 「学生」「学問僧」 —

泉 敬 史

1 「学生」

「学生」と書いてここでは「がくしょう」と読みたい。推古天皇十六年(608)九月辛巳、唐客裴世清の送使として再度隋に向かう小野妹子に同行する留学者4人に対して付けられたことばである^①。この「学生」に『日本書紀』は「フムヤワラハ」と付記している^②。意味することを母語で付記したのだろうか。いかにも「学生」はこれが『書紀』の初出である。これ以前に使われた例はない^③。

ところでこの4人はたしかに「学生」だったのだろうか。「学生」とは中国では『後漢書・靈帝紀』が「光和元年(178)、始置鴻都門学生」^④と記して430年も早くその立場を定められているが、日本において『令義解』が職員令学生寮条で「博士一人。掌教授経業。課試学生。助教二人。掌同博士。学生四百人。掌分受経業。」と明記するのは、養老令を基準化しようとする、かなり後の淳和期のことである。これら4人の留学者が隋に遣わされる時点では、「学生」とは中国の制度からの借りものであり、日本ではまだ実体のないことばであった可能性が高い。だからこそ『書紀』は「学生」と書いて「ガクシヤウ」とルビするのではなく、「フムヤワラハ」とそこに込めた意味を注記したのだろう。影印を見るとこの付記はくっきりと明確に記されており、それだけこれが付記されるべきだったことを感じさせる。

「学生」とは馴染みのうすい語句だった。また、そもそも「フムヤワラハ」とは何を意味するのか。「学」も「生」も、これを二文字並べて「フムヤワラハ」と訓読できる典拠や用例は見つけられなかった。つまりこれはルビではない。そこで「学」と書いて「フム」と意味づける根拠を考えると、船史田辺史津史等、渡来系氏族が世襲した文筆や記録を担当する職務の「史(ふみひと・ふひと)」というカバネに行き当たる。というのは、この「史」の読みは「フミ」ではあるが、『書紀』の訓ではこれを「フム」とする例がいくつか見られ^⑤、

「フムヤ」の「フム」を「史」の意味にとらえることができるからである。「フム」が「フミ」であるならば、「史」はもとより「文」や「書」との絡みも自ずと想起され、書物や学問といった「学」の語意につながるとして、「フム」と記されたとも考えられる。また、令義解では大学頭を「フムヤノカシラ」、図書頭を「フムノカシラ」、大学助を「フムヤノスケ」、大学博士を「フムヤノハカセ」、書博士を「フムノハカセ」等付記しており、ずっと以後のことではあるが、少なくとも「フム」あるいは「フムヤ」と「学」や「書」に意味上のつながりを持たせる傾向を認めることはできよう。

「フムヤワラハ」を「学ワラハ」とするならば、「ワラハ」が「生」ということになる。同じく『令義解』によれば、そもそも「生」とはさまざまな行政部門であるたとえば寮ならば博士や助教の下位に置かれた陰陽生・曆生・天文生・楽生等、司であれば正や佐・令史の下位に置かれた薬生等、省であれば卿や輔・丞や録の下位に置かれた史生等官職名の下一文字で、「学生」は大学寮の構成員としてこれらと同様に配置されている。問題はこれが「ワラハ」と付記されていることで、諸本によっては「ハラハ」と付記される例も見られるが、ひとつの答えとして用意できるのは「童」、つまり「学童」として、「学ぶ子ども」とでも意味づけられる「フムヤワラハ」である。

漢語としての「学生」、つまり「学ぶ人」を意味することばを留学者に対する呼称として用い、それを「フムヤワラハ（学童）」と意味づけたのが、古代日本の留学者がまず初めに置かれた立場だった。学ぶとはすなわち留学することであり、留学者とはすなわち「学童」である。留学古代日本が初めて国家として派遣した4人の留学者たちは、中国が定めた「^{がくしょう}学生」とは異なる「^{フムヤワラハ}学生」として故国を後にしたのである。

2 「フムヤワラハ」と「モノナラフヒト」

この4人の留学者たちとは『書紀』推古十六年(608)の記述によると以下のとおりである。

遣於唐国学生倭漢直福因。奈羅譯語惠明。高向漢人玄理。新漢人大國。

倭漢直福因（ヤマトノアヤノアタヒフクイム）は15年後の推古三十一年（623）に、

大唐学問者僧惠齊。惠光。及醫惠日。福因等來之。於是。惠日等共奏聞曰。留於唐國學者。皆學以成業。應喚。

と再登場している。長い留学から帰朝したことが記されているが、ここでは「大唐学問者僧(モロコシノモノナラフヒトハウシ)」と付記されており、かつてのような「フムヤワラハ」ではない。奈羅譯語恵明(ナラノヲサノエミヤウ)はこの後正史に見えず、高向漢人玄理(タカムクノアヤノヒトクロマサ)は舒明十二年(640)に、

大唐學問僧清安。學生高向漢人玄理傳新羅而至之。仍百濟。新羅朝貢之使共從來之。

と32年ぶりの帰朝が記されているが、ここでは「フムヤワラハ」の付記のままである。新漢人大國(イマキノアヤヒトヲホクニ)もその後正史に見えない。そこで「学生」の記載を追ってみると、吉士長丹を大使とする白雉の使節発遣を記す白雉四年(653)に、「学生」として巨勢臣薬と氷連老人、「或本」で坂合部連磐積の3人の名が見られるが、ここでは「モノナラフヒト」と付記されている。次の記載、天武四年(675)正月の「大學寮諸学生」等が天皇に菓や珍異を捧げる記述では「フムヤワラハ」の付記に戻されているが、さらに下った同十三年(684)十二月の記載^⑥では再び「モノナラフヒト」となり、続く天武紀朱鳥元年(686)の「学生」に付記はなく^⑦、『書紀』に見える最後の記載である持統四年(690)十月条^⑧も「モノナラフヒト」と付記している。一見まちまちのようにも思えるが、同じ「学生」でも留学者に対しては「モノナラフヒト」と付記し、そうではない大学寮諸学生には「フムヤワラハ」と付記する使い分けを『書紀』は始めているのである。同じ「学生」でも学童を意味する「フムヤワラハ」と付記するか「モノナラフヒト」とするか、このような付記の使い分けが始まった背景に、留学者が置かれた立場の変化を見て取ることができよう。

『書紀』は推古十六年(608)から持統四年(690)までの82年間で都合7回「学生」の記載を残すが^⑨、内6回は留学者を指す記載であり^⑩、内2回に「フムヤワラハ」の付記が見られる。ただしそう付記された留学者は最初の4人のみで、それ以降の留学者には見えず、彼らには付記なしの一例を除いて「モノナラフヒト」と付記され、「ワラハ」から「ヒト」へといわば格上げされている。留学者の出現に際して、古代日本は「学生」というあまり使い慣れない中国の官職名をそれに充てたが、おそらくは留学がもたらした重大な成果と、国内大学寮で学ぶ者たちとの区別の必要等を勘案し、付記が書き分けられることにつながる何らかの措置が取られたのだろう。これはまた、『続日本紀』から見え始める「留學生(るがくしょう)」や「請益(しょうやく)」といった留学者を指す別呼称の派生にもつながったように思われる。

3 「学問僧」

『書紀』が記すわが国最初の留学者は善信等複数の尼僧たちで、彼女たちは受戒法を学ぶために百済に留学し、2年後に帰朝した際の記載では「学問尼」とされている^⑪。その6年後に朝廷は隋に向けて8人の留学者を送り出すが、その内4人は「学生」、残り4人は「学問僧」とされている。古代日本の留学者たちはこうして歴史の上に足跡を残し始めるのだが、もっとも早いこの時期から、「学生」と「学問僧（尼）」の僧俗2つに分けられていたことが知られる。また、その内「学生」は「フムヤワラハ」と「モノナラフヒト」のさらに2つに分けられていたことはすでに述べた。ここでは「学問僧」について考えていきたい。

「学問僧」と書いて、『書紀』は「モノナラフホウシ」と付記している。善信等の尼には「学問尼」と書いて「モノナラヒノアマ」とある。ただし、善信等には百済からの帰国後、つまり留学後に初めてこの呼び方をしているのに対して、隋に向かわせた4人の留学僧に対しては、発遣する段階から「学問僧」と呼んでいる。100年以上も後ではあるが『令義解』で「学生」が官職名とされているのに対して、官人ではない僧たちに付く「学問僧」は官職ではないあくまで「そういった呼び方」に過ぎず、何かの論拠にするには心もとなくはあるが、留学者たちの創成期に使われた呼び方として以後との比較には役立てられよう。『書紀』は13ヵ所で「学問僧」の記載を残しているが、そのすべてが留学者を指しており、国内での学僧を指す例は見られない。あるいは、僧籍の留学者をとりわけて「学問僧（モノナラフホウシ）」と呼ぶ、あたかも留学こそが学問といった空気を彼らは呼吸していたのかもしれない。

さて、古代日本最初の「学問僧」とは以下の4人である^⑫。

学問僧新漢人日文。南淵漢人請安。志賀漢人惠隠。新漢人廣齊（以下略）

全員が「漢人」、つまり渡来系の僧である。新漢人日文（イマキノアヤヒトニチモム）は24年後の舒明四年（632）八月に僧旻として帰朝の記載がある。その12年後には同時期の留学者として隋に渡った「学生」高向玄理と共に国博士任官の記事が見え、他にも朝廷に重用されたことを伺わせる記載が散見される。白雉四年（653）歿。南淵漢人請安（ミナフチノアヤヒトシアウアム）は32年後の舒明十二年（640）十月に玄理と共に帰朝の記載があり、皇極三年（644）正月には南淵先生として中大兄と中臣鎌子に周孔の教えを伝える記載が見える。志賀漢人惠隠（シカノアヤヒトエラム）は31年後の舒明十一年九月

に帰朝の記載があり、その後2度にわたって勅命で『無量寿経』を講釈している。新漢人廣齊（イマキノアヤヒトクワウサイ）はその後見えない。

これら4人が最初の学問僧であるが、それはあくまで『書紀』が書き残したということ、彼ら4人以外にも留学していた学問僧たちがいたことは同じく『書紀』の帰朝記事等から知ることができる。

大唐學問者僧惠齊。惠光。及醫惠日。福因等並從智洗爾等來之。於是。惠日等共奏聞曰。留于唐國學者。皆學以成業。應喚。

これはすでに触れた推古三一年（623）七月の記載であるが、ここに名を挙げられた学問僧惠齊と惠光は、かつて隋に留学した学生4人のひとり、福因と共に新羅使智洗爾に従って帰朝しており、同じく留学者と思われる。また、彼らが奏上した内容から、唐で学んでいる者が他にもいたことがわかる。「学問僧」は「学生」と違い官人ではなく、学問僧としての留学者たちはその分正史に名を留めないケースも多かったのだろう^⑧。『隋書・倭国伝』大業三年（607）の以下の記載もこれを裏付ける。

聞海西菩薩天子重興佛法故遣朝拜兼沙門數十人來學佛法

よく知られる「日出る処の天子、書を日没する処の天子に致す、恙無きや」云々の国書につながる文面だが、翌608年に8人の留学者が発遣されるひとつ前の遣隋使に関する記載である。数十人の沙門が仏法を学ぶために同行したことが記されているが、同じ使節を『書紀』は以下の簡単な記述で済ませている。

秋七月戊申朔庚戌。大禮小野臣妹子遣於大唐。以鞍作福利爲通事。

日本の正史では触れられないままに、数十人の「学問僧」が隋の地に渡っているのである。

4 創成期の留学者たち

それでは『書紀』が書き残す古代日本の留学者たちにもう少し詳しく目を向けていきたい。『書紀』は留学者を「学生」、「学問僧」、「学問尼」の3つに分けている。その内「学問尼」はすでに述べた善信等百済へ留学した尼僧たちだけで^④、その後女性の留学者は登場しない。「学生」は「フムヤワラハ」と「モノナラフヒト」の2つに分けられ、「フムヤワラハ」は608年に隋に遣わされた最初の留学者8人中の4人のみが当てはまる。彼ら以外の留学者としての「学生」に「フムヤワラハ」は存在せず、「モノナラフヒト」が付記なしかのいずれかになる。これは留学者に対する処遇の変化として受け取ることができ、同時に、現在のような一般名詞ではない、官職としての「学生」という、それまでは無かった新たな立場の創生とも関連づけられる。「学問僧」は総じて「学生」よりも人数が多く、それは出国時期不明の、いつの間にか留学者となっていた「学問僧」が幾人か見えることにも呼応しよう。また、「学問僧」の中には「高句麗学問僧」や「於三韓遣学問僧」といった朝鮮半島への留学者が見られるのに対して、「学生」は隋あるいは唐への留学者に限られている。遣唐使船の航路に北路と南路があり、半島国家との国際情勢によって北路からより危険な南路に切り替えられていったのはよく知られている通りだが、古代日本が行った留学行為のあらましも、半島との関係を切り口に考えてみる余地がある。この、「学生」を半島には派遣しないというのもその1つであろうし、そもそも半島に対する、仏教伝来の道筋として「学問僧」たちが寄せた思いと、仏教を学ぶわけではないしかも官吏たる「学生」たちが抱いたある種の抵抗感との間にはそれなりの隔たりもあったことだろう。そのあたりを半島の情勢と絡めながら考えていきたい。

古代日本の留学者たちが歴史に姿を現し始めた時期、即ち6世紀後半から7世紀初頭にかけての東アジア情勢は緊迫したものだった。それまでも朝鮮三国は半島内での勢力争いに明け暮れていた。常に高句麗の南進に悩まされていた百済と伽耶を間に挟んで拮抗する新羅は、欽明二十三年(562)一月に『書紀』が「任那官家」^⑤と呼んだ伽耶を滅ぼし、新羅との緩衝地帯を失った百済はそれまで以上に倭国の軍事力を積極的に利用しようとして対倭接近外交を展開する。大陸では581年に隋が興きて9年後には統一国家を樹立、国境を接する高句麗は結局前後四度にわたる隋の侵略を受けることになる。それに漁夫の利を得た百済が伽耶の権益を新羅から奪取するといった大きな国際情勢のうねりを反映して、これら三国は頻繁に倭国へと外交使節を送り込み、特に同盟度を高めていた倭国と百済とは軍事的なサポートとその見返りとしての文物の提供という互いの欲するものを提供し合いながらの外交が活発化していった。その結果倭国への文化伝播が促進されていく。いわ

ゆる仏教公伝もそのひとつであるし、善信等の留学も同様である。使節団の中には交渉や立場を有利にするための手札として最新の知識や技術の専門家も加わっていた。敏達六年(577)5月に大別王と小黒吉士を百済に送る記載が見えるが、半年後に帰国した際に百済王から経論・律師・禪師・比丘尼・呪禁師・造仏工・造寺工が献じられたり^⑥、崇峻元年(588)にも同じく百済から僧侶・寺工・鑪盤博士・瓦博士・画工が遣わされた^⑦のもこうした外交交渉の結果であろう。推古十年(602)には百済僧観勒が来朝して暦や天文や方術等の書を献じ、加えて書生数名を彼につけて学ばせるといった僧侶を介しての仏法以外の受容の例も見え^⑧、人的交流を以て文物の移入を図るまさに留学者の時代へと向かう潮流が現出し始める。推古十八年(610)三月には高句麗王から二人の僧が貢上されているが、その一人曇徴は五経に通じ、彩色、紙、墨の製法にも長け、碾磑(てんがい・水車のこと)も造れ、これがわが国での水車造りの初めとなったとある^⑨。五経とは儒学の教えであるし、これも仏教仏法の枠に捕われない広範な文物が僧侶によって伝えられている事例であり、そういった人的活用・人的交流が行われていたことが見て取れる。

中国王朝にとって東方に位置する国やそこに暮らす人々は海東、東夷等とよばれる未開地であり蛮族だった。それが倭という国名で呼ばれるだけの固有性を得るに至ったのはひとえに中国文化を受け入れ続けたからであり、それへの恭順さを示し続けたからに他ならない。だからこそ中国の歴史に名を残す倭国の王たちは朝貢を繰り返して中国文化の摂取に努め、機会があれば朝鮮半島の国々からも、あるいは友好的、あるいは非友好的な交流を通じて不足ない受容に励んだ。多くの渡来人が受け入れられ、渡来系の氏族が活躍の場を与えられたことも、この流れを汲むものといえよう。最新の知識や科学技術、制度や思想や情報は、国家や権力の盛衰に関わる最重要事項であったと同時に、人間が宿命的に受け継ぐ知的好奇心という欲求を満たしてくれる快樂でもあった。もっと欲しいまだ欲しいという支配者たちの欲求に、より積極的に応じていこうとしたのが留学者たちだった。

5 「学生」「学問僧」以前の留学者たち

すでに述べたように留学者たちが「学生」「学問僧(尼)」とよばれたのは崇峻三年(590)と推古十六年(608)からであるが、それよりも早くから留学者の役割を果たすことになる半島や大陸への往還者たちがいた。『書紀』は天皇への貢上や献上によって百済を主とする半島の国々から多くの文物やその専門家たちがもたらされたことを書き残しているが、これらは事実ではあっても事実のすべてではなく、いわば天皇の持つ力の大きさを示すための選別された記載でもあった。使節の往還や軍事的遠征も含めた人的交流が行われていた以上、それらを機に、こちらから文物を求めて人を派遣する、あるいは派遣した人に文物を求めさせることがあったと考える方が自然で、ただ積極的には書き残されなかったということだろう。

推古朝に派遣された最初の留学者たちの帰国記事に、ともに帰国したことが伝えられる未知の名前がいくつか見られる。彼らも同じ留学者かと思われるが、いつ出国したのかは不明である。恵齊・恵光・恵日・靈雲・恵雲といった僧侶たちと、官人の会丞、さらに勝鳥養という人物である。

推古三十一年(623)7月「新羅遣大使奈末智洗爾。任那遣達率奈末智。並來朝。仍貢佛

像一具。及金塔并舍利。且大灌頂幡一具。小幡十二條。即佛像居於葛野秦寺。以餘舍利。金塔。灌頂幡等皆納于四天王寺。是時。大唐學問者僧惠齊。惠光。及醫惠日。福因等並從智洗爾等來之。於是。惠日等共奏聞曰。留于唐國學者。皆學以成業。應喚。」

すでに2度触れている箇所だが、ここで福因とともに帰国した恵齊・恵光・恵日の名前が見える。このうち恵日ひとは7年後の舒明二年(630)の第一次遣唐使節の使人として犬上三田耜とともに唐に遣わされているが、その他の2人、恵齊と恵光はここに名を残すのみである。また、恵日の奏上でわかるとおり、他にも唐で学んでいる留学者がいたことはすでに述べた。彼らは前述した『隋書』がいう数十人の仏法を学びにきた沙門たちだったのかもしれない、あるいはその他の機会に唐に渡った留学者だったのかもしれない。

舒明四年(632)八月「大唐遣高表仁送三田耜共泊于對馬。是時學問僧靈雲。僧旻。及勝鳥養。新羅送使等從之。」

霊雲と勝鳥養はここで初めて登場する。二人はここで第一次遣唐使として唐に渡った犬上三田耜とともに、送使高表仁に送られて帰国を果たしている。これまで全員が僧侶だったのに対して、その名前から勝鳥養という人物は俗籍かと思われる。彼はここにしか名を留めない正体不明の人だが、ここにもうひとり会丞という日本の文献には現れない人物がいて、この両者は同一人物の可能性²⁰⁾がある。

『法苑珠林』卷五十一「倭國在此洲外大海中距會稽萬餘里隋大業初彼國官人會丞來此學問内外博知至唐貞觀五年共本國道俗七人方還倭國未去之時京内大德每問彼國佛法之事因問阿育王依經所說佛入涅槃一百年後出世取佛八國舍利使諸神一億家為一佛塔造八萬四千塔徧閻浮洲彼國佛法晚至未知己前有阿育王塔不會丞答曰彼國文字不說無所承據然驗其靈迹則有所歸故彼土人開發土地往往得古塔靈盤佛諸儀相數放神光種種奇瑞詳此嘉應故知先有也」

隋の大業年間(605)から二十四年(616)の延べ16年間で、貞觀五年(631)とは、鳥養が帰国した前年にあたる。官人会丞が推論どおり鳥養の中国での名前であったなら、彼は正しく官人の留学者、つまり「学生」だったことになる。

舒明十一年(639)九月「大唐學問僧惠隱。惠雲。從新羅送使入京」

ここに大唐学問僧惠雲の名が見える。推古十六年(645)に入隋した学問僧志賀漢人惠隱とともに新羅經由で帰朝している。彼は6年後の大化元年(645)に新たに即位した孝徳天皇から、さらに仏教を盛んにするために僧たちの教導にあたる十師のひとり選ばれている²¹⁾。また、皇極四年四月には鞍作得志という高句麗への留学者にまつわる記載が見られる。得志自身はその名から俗籍の「学生」と思われるが、彼に関する報告をしたのが「高麗学問僧等」となっており、高句麗への僧俗両方の留学者の存在をうかがわせる²²⁾。

以上『書紀』の記載を縦糸にして、古代日本の留学者が「学生」「学問僧」とよばれた時代について述べた。古代日本は先進の技術や知識や制度や思想を長く強く海外に求め続けたが、それを可能にする前提は国際交流だった。渡来人たちが果たした役割も、使節たちが果たした役割も大きいものであったが、国としてより積極的にそれを求めようとしたことが外国で学び取るという行為を発揚し、やがてそれを専らとして海外に赴く留学者という立場が現出する。その意味で留学者たちが置かれた立場を見ていくことは、古代日本が東アジアという国際舞台とどう対峙したのかを考える際の貴重な手がかりになり得よう。

注記

- 注① 他に「学問僧」として四人の僧侶も加えた八人の遣隋留学者たちがここで初めてわが国の歴史に顔を見せている。「学問僧」には「モノナラフホフシ」と付記されている。
- 注② 宮内庁書陵部本影印
- 注③ ただ、留学者にあてられたことばとしては、百済に受戒法を学びに行った善信尼等が、崇峻天皇即位前記（587）六月甲子に「願向百済学受戒法」と『書紀』に記されて出立し、三年後の崇峻三年（590）春三月に「学問尼善信等自百済還住櫻井寺」と帰朝が記された例がある。
- 注④ 始置鴻都門學生鴻都門名也於内置學時其中諸生皆勅州郡三公舉召能為尺牘辭賦及工書鳥篆者相課試至千人焉
- 注⑤ 履中紀四年八月「始之於諸国置国史。記言事達四方志」の「国史」に「^{フミヒト}文人也」,雄略紀二年十月「置史戸。河上舍人部。天皇以心為師。誤殺人衆。天下誹謗言。太悪天皇也。唯所愛寵。史部身狹村主青。檜隈民使博德等也」の「史戸」に「フミヒト」あるいは「フムヒト」,「史部」に「フムヒト」,孝徳紀大化元年八月「其長官従者九人。次官従者七人。主典従者五人」の「主典」に「フムヒト」等。なお、「フミヒト」・「フムヒト」は「主帳・令史・史生・主典」の和訓語が充てられる例がある。
- 注⑥ 「大唐學生土師宿禰甥。白猪史寶然。及百済役時没大唐者猪使連子首。筑紫三宅連得許。傳新羅至。則新羅遣大奈末金物儒。送甥等於筑紫。」
- 注⑦ 「庚午。工匠。陰陽師。侍醫。大唐學生。及一二官人。併三四人授爵位」
- 注⑧ 「遣使者詔筑紫大宰河内王等曰。饗新羅遣使大奈末金高訓等。准上送學生土師宿禰甥等送使之例。」
- 注⑨ 白雉五年（654）の註記を除く。
- 注⑩ 残る1つは上述した「大學寮諸學生」で「フムヤワラハ」と付記されている。
- 注⑪ 崇峻即位前記（587）「善信阿尼等謂大臣曰。出家之途以戒爲本。願向百済學受戒法。」
崇峻元年三月（588）「蘇我馬子宿禰請百済僧等。問受戒之法。以善信尼等付百済國使恩率首信等。發遣學問。」
崇峻三年三月（590）「學問尼善信等。自百済還住櫻井寺」
- 注⑫ 推古十六年（608）九月条
- 注⑬ 「学生」においても、井真成墓誌発見の例に見える通り、官職だからといって皆が史料に名を残すわけではない。むしろごく一部と捉えるべきだろう。
- 注⑭ 敏達十三年（584）に見える善信とその弟子惠善と禪蔵の3人とされる。
- 注⑮ 欽明二十三年（562）「春正月。新羅打減任那官家」
『三国史記』には加耶（加羅）仇衡王による新羅への降伏として書かれている。
- 注⑯ 敏達六年（577）五月「遣大別王與小黑吉士。宰於百済國」十一月「百済國王付還使大別王等。獻經論若干卷并律師。禪師。比丘尼。咒禁師。造佛工。造寺工六人。遂安置於難波大別王寺。」
- 注⑰ 崇峻元年（588）「是歲。百済國遣使并僧惠慈。令斤。惠寔等。獻佛舍利。百済國遣恩率首信。德率蓋文。那率福富味身等進調。并獻佛舍利。僧聆照律師。令威。惠衆。惠宿。道嚴。令開等。寺工太良未太。文賈古子。鑪盤博士将徳白味淳。瓦博士麻奈文奴。陽貴文。陵貴文。昔麻帝彌。畫工白加。」
- 注⑱ 推古十年（602）十月「百済僧觀勒來之。仍貢曆本及天文地理書。并遁甲方術之書也。是時選書生三四人。以俾學習於觀勒矣。陽胡史祖玉陳習曆法。大友村主高聰學天文遁甲。山背臣日並立學方術。皆學以成業。」
- 注⑲ 推古十八年三月「高麗王貢上僧曇徴。法定。曇徴知五經。且能作彩色及紙墨。并造碾磑。盖造碾磑始于是時歟。」
- 注⑳ 「謎の渡海者勝鳥養をめぐる考察」2004年1月勉誠出版刊『交錯する古代』所収
「日本古代留学者－勝鳥養」2002年3月『札幌大学総合論叢13』所収

- 注② 「朕更復思崇正教光啓大猷。故沙門狛大法師福亮。惠雲。常安。靈雲。惠至。寺主僧旻。道登。惠隣。而爲十師。別以惠妙法師爲百濟寺々主。此十師等宜能教導衆僧。」このうち惠雲、靈雲、僧旻の3人には留学者としての足跡が確認できる。その他の人物にその足跡は確認できないが、だからといって留学者であった可能性を否定することはできない。また『続日本紀』養老五年六月条に見える沙門行善は「負笈遊学。既経七代」とあり、『日本靈異記』には推古朝に遣わされた高句麗への留学者として同名の人物が登場する。ここで「遊学」という語を『続紀』は使っているが、これは『書紀』には見られない語で、しかも半島への留学者に対してのみ使われている点で興味深い。
- 注③ 「夏四月戊戌朔。高麗学問僧等言。同學鞍作得志。以虎爲友。學取其術。或使枯山變爲青山。或使黃地變爲白水。種々奇術不可殫究。又虎授其針曰。慎矣慎矣。勿令人知。以此治之病無不癒。果如所言。治無不差。得志恒以其針隱置柱中。於後折其柱取針走去。高麗國知得志欲歸之意。與毒殺之。」